

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第163号（2019年12月）



白井啓治

（一）雨に笑顔の愕紫陽花

『とぼとぼ歩いて紫陽花の笑顔』

この梅雨の時期、忙しい晴れ間を偷（ぬす）んでは散歩に出かけるのであるが、あちこちの庭先で紫陽花に笑顔を向けられる。雨上がりの雲の隙間から差し込む陽に照らされて、花弁に乗せた雨滴と共に鮮やかを誇る様を見ると本当に綺麗だなと思う。

しかし、垣根から顔を出す紫陽花の殆どが西洋紫陽花である。個人的な感覚の問題であるが、豊富な西洋紫陽花は余り好きではない。

山桜の終りの頃、このコーナーの絵を描いていただいている兼平さん達とスケッチに出かけた時に、桜の花は雑木林の中に秘すかのように咲く山桜が一番。ソメイヨシノは暑苦しさがあつて好きじゃないな、八重はもつと好きでない。と話したら、女性軍の全員から「あら、そんなことありません。八重桜は綺麗じゃないですか」と反発を貰ってしまった。

それで私は、このように話した。「個人的な感覚

だけど、八重の花は酒場女の厚化粧の感じがして、どうも嬉しくない」と。そうしたら、もつと強い反発の顔を貰ってしまった。しかし、私は彼女達に反発されても、八重の花より一重の花が密やかで好きだ。紫陽花も西洋紫陽花は、酒場女の厚化粧の感じがする。専紫陽花の方が好きだ。だが、これは比較すればの事で、どの花も綺麗である事は否定するものではない。



（絵：兼平ちえこ）

我家の庭にも西洋紫陽花が咲いている。昨年あまり茂ってくるので、根本から思い切り刈り込んでやったら、今年は土の栄養配分が多くなった所為

なのか、サッカーボールほどの花が咲いている。豊満すぎる花卉の一つ一つが色変わりするのを眺めながら『紫陽花も恋に狂って七変化』と呟き、花の一つを花瓶に生けてやろうと、はさみを持つて近づき、紫陽花の根本をみたら、ダンゴ虫の集団がうようよと湧き、戯れているのを見つけてしまった。花弁を散らさずシミだらけになつて枯れていく紫陽花の明日の姿が目につかび、男に翻弄され、裏切られた酒場女の末路を見るような思いにとらわれた。そして、頭の中に男に騙された女の怨み節のド演歌が流れた。（2008年7月10日）（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを順に載せています。）

《ふるさとの風に呟いて…》

友より便りが届く
汗流して雑草を抜く
地蜂が懸命に穴掘りをしている
生れたばかりの子蜥蜴二匹が走り回っている
天に高く雲雀が啼いている
野鳩がぼっぼ、ぼっぼと声している
お犬様は陽だまりに軒をかいている

平安なり

のどかなり

この太平なる一日、

明日もあるか



「燿歌」(かがい)。今は、こんな言葉は、とんと見当たらないが、上代において、男女が山や市(いち)などに集まって、互いに歌を詠み交わし、舞踏をして遊んだ行事を言うらしい。更に一種の求婚方式で、性的開放が行われた…と広辞苑にある。常陸風土記にも筑波山は、常連の恒例の場所であったらしい。更に出島の歩み崎観音にも、このような事が書いてある。

このような行為は、何も上代でなくとも、古今東西を問わず、今でも形を変えて、盛んに行われており、カラオケでも、ライブでも普通のダンスパーティーでも同じ事。謹厳実直な御仁には卑猥な…と眉をしかめる方もあるが、私は、これこそ、人類大繁栄の原動力と考える。中南米の若者たちは、昼間たつぷり休み、深夜までダンスパーティーを楽しんでいる。素直な野生時代の貴重な延長と考えたい。

*

人類は元々、一夫一妻ではない。チンパンジーと同じ多夫多妻の乱婚型なのである。チンパンジーとの共通祖先から700万年前分離して、直立二足歩行開始時期が、人類の起源とされる。そして分離した直後から120万年間は、ヒトとチンパンジーとの間に、合いの子(雑種)が生まれていたようである。獣姦などと罵るのは、原人から見たら、新人の青二才の戯言に過ぎないであろう。とにかく化石が証明しているのだから、素直に従うほかならう。その後は、ヒトの染色体が、1対(つい)2個減って、23対46本となり、チンパンジーより2本少なくなったため、雑種はできな

くなった。

ヒトは猿人時代から色々な遺伝子を失って大きな進化を遂げた。例えば体毛を失い、汗腺のエクリン腺が発達し、水分の多い汗をかくことができ、気化熱により、体温を放出し、長距離を走れるようになった。その為、大きな動物の狩猟にも成功するようになった。視力・嗅覚などが鈍ったため、頭脳が発達して言語や道具を造る能力が発達した。更に犬歯が弱小化した為に、咬筋が減少し、その分、頭脳が発達した。何かが減れば何かが増える。

話を戻し、日本では、明治維新の時、外国を見学してきた使節団が西洋に倣い、法で定め、夫婦は一夫一妻の重婚禁止と、法律で規定した。それまでは、重婚は当たり前で、100人近い子供を造った將軍もいた。それが良いという訳ではないが、どうせ守られない法律なら、今日、もつと優柔な世相に馴染んだ法律にした方が、よりよいと思う。

日本の3大ザル法をご存知? 建築基準法と政治資金規正法。それに何と言っても守られていないのが、売春禁止法である。赤い灯・青い灯がとても元氣だ。どんな先進国、文明国と言えども、売春禁止法は、有って無きが如し…。それが実情である。どこの国の軍隊も、酒とタバコと女性なくして軍は進まない。

ジンギスカンが、あれ程の勢力を張れたのも、行軍する部隊の後ろには、いつでも羊の群れを付けていたから…と言われる。寒ければ即、毛皮になるし、飼料は運ばなくとも草だけで済む。肉は新鮮な食料になる。そして雌羊は兵士の慰みものとなる。こんな優れた後援物資はない。とにかく世の中は、綺麗事のみでは潤滑に回転しない。国

会の女性議員の様に、ただ一直線で、柳眉を逆立て何もかも、金切り声で反対反対では、国家は成り立たない。

*

私は、浮気は大目に見ろ…と言っているのではない。但し、そういう事が、人類大繁栄の原動力になったと信じている。冗談ではあるが、世の奥様方は、燕がやっているように子供を3人産むなら、その一人は主人以外の男性の子を宿したらいいかがですか…と半ば本気で言いたい。浮気は平等に奥さんもやれ!! そうすれば兄貴は草野球の選手でも、弟はイチロウになるかもしれない。要するに、多様性がなければ人類は滅亡する。そこに多夫多妻の重要な意味がある。

セイウチやライオンの雄等、一匹の王者が群れを完全支配し、他の雄を寄せ付けず繁殖している様に見えるが、とんでもない。雌たちは、隠れてちゃっかり、弱小雄と交尾をしている。そうしなければ、種の多様性が失われ、何かの伝染病など、はやれば一網打尽で消滅してしまう。多様性があれば、誰かが死んでも誰かが生き残る。残った者で群れを復活させ、種の生命を維持できる。浮気はリセットの高等手段だ。

少々飛躍かもしれないがこれが繁栄の重大なストリープである。徳川幕府は、世襲で將軍職を継いでいるが、代を重ねると種切れとなり、他から後継者を迎えるほかなくなる。そこにまた一悶着発生。繁栄を願うなら、多様性をしっかりと確保することが大事。

こんな事を堂々と述べると、なんだこいつ、馬鹿か気違いかと道徳を重んじる御仁から叱られそうだが、生物の種の保存の立場から、わずか1万

年そこそこの文明が生み出した、未熟な文化など鼻つたれ小僧だ。生物進化の原理に背く浅智恵など、人類は頭が良いのか馬鹿なのか私は迷ってしまふ。もし道徳教育の専門家とか有名な哲学者等が、論戦を挑んできたら、私は戦うつもり。きつと論破して見せる。

＊

人類は発祥以来700万年であるが、アフリカを離れた以降のホモ・サピエンスは、わずか7万年しか経っていない。大脳の進化がどうのこうのではなく、アフリカで経過した肉体の変化(進化)は、わずか7万年。いや、農耕牧畜開始からでは、わずか1万年の文化など、遺伝子同士の戦いで、絶対に古い伝統が優勢なのである。

遺伝子の受精卵内競争劇を見ると、例えば黒い皮膚は白い皮膚の遺伝子より絶対優勢である。黒人がユーラシア北部などへ進出して、紫外線が弱くなったので、黒い肌の必要はなくなった。白い肌になってから、まだ数万年。何百万年もアフリカで鍛え、黒い皮膚の安全性の原理が、受精の際、優勢に遺伝するのは当たり前。色白の遺伝子は完全に色黒の遺伝子に押さえつけられるのである。

赤道直下なのにチンパンジーの肌は白色である。勿論人類の祖先も同じ事。ところが人類の祖先は赤道直下で、気候変動により、樹林が少ない疎林のサバンナへと進出せざるを得なくなった。すると、樹木の葉や黒い体毛で守られていた白い皮膚は露出する。そうなれば皮膚がんになり、生きていけなくなる。そこで、黒い体毛を捨て、自然と皮膚の色自体を、メラニン色素で黒くして、紫外線を防ぐように進化した。皮膚を黒くする事によ

り、人類は生き延びる事ができた。また、熱帯では放熱の為、皮膚の表面積を増やそうとして、例えば喉は二重になった。一方ユーラシア奥地まで進出し、白人(コーカソイド)となった人類は、凍傷などを防ぐ為、喉は二重から一重となり、皮膚表面積を減らすように進化した。今、白人と黒人が結婚すれば、受精の際、二重喉の遺伝子が優先し、長いアフリカ時代がものを云う。なお、サピエンスより早くからヨーロッパ北部まで進出していたネアンデルタール人(旧人)は、皮膚の色は透き通るような白さ。目は青く、髪の毛は金色。後発のサピエンスはこの先輩と交雑し、青い目・金髪・超白色の肌を貰った。アフリカを除いて全世界の人類の遺伝子の2%は、ネアンデルタールの血を受け継いでいるという。初期の中、サピエンスはネアンデルタール人を野蛮で粗野な蛮人とみなしていたが、素晴らしい絵をかき武器も持ち、脳容積はサピエンスよりも大きかった。とかく見慣れないものは、警戒し、敵視するもの。ネアンデルタール人は我らサピエンスより10万年ぐらい早く、同じ原人ホモ・エレクトスから生まれた兄貴分なのである。

余談になるが、私は若い時、町内の役員にされ、懸命に働いたが、祭りの時、町内の大酒飲みが年寄りに、おめえどこの馬の骨だ?といわれた。あーやつぱり年寄りは、見慣れぬ者に対しては、攻撃的になるものだと分かった。岩手から出てきた山猿めが：ぐらいに思っていたのであろう。それ以降私は、今に見ている!勉強して見返してやるからと、努力し始めた。子どもや孫達にも立派な社会人となり、馬鹿にされないよう努力せよと言って育てた。私の3親等内に博士が3人もいる。

医博2人と農博一人計3人である。そんな事どうでもよいのだが、蔑視していた兄貴分のネアンデルタール人の血を、アフリカを除いて今、全人類が引いているとは知らなかった。

そして歴史自慢の他の老人に詳細な地元の歴史を訪ねても、根拠の薄い言い伝えぐらいで、何にも分かっていないのにはガックリした。歴史が自慢なら、しっかり文献を調べて、郷土発展に根拠をもって自慢すべきである。長く住んでいるからと言って、新しい人を見下すのはいかなるものか?風の会会員の木村さんの埋もれた郷土歴史発掘には、頭が下がる。実に面白い。

＊

さて、神様が男性を軽視している証拠は、我々の精巢の位置である。大事なものならば、しっかりした骨組みで囲い、木や岩で傷つくような軽率な造形はしなかった筈。被害妄想かもしれないが、神様は男を軽視している。ま、雄は消耗品と考えれば、妊娠・分娩・哺乳などの重い役に比べたら確かに軽微なもの。この世にオスが誕生したのは、雌誕生のはるか後。生命誕生38億年前。雄誕生10億年前。生物は雌のみの細胞分裂によるクローン(遺伝的に同一の個体、増殖のみでは、何かの伝染病流行があれば全滅する(抵抗力はどの個体もみな同じ)。そこでオスなるものが存在し、受精の時、遺伝子をシャッフルすれば多様性のある個体が多数生まれる。雄の誕生は、私に言わせれば、神様の最大の発明である。強烈な伝染病流行などで、大部分は死んでも、あるものは生き延び、種の寿命が絶える事はない。雄は、雌の付属品のようなものだが、重要な使命を帯びている。但し、霞ヶ浦のギンブナは、雌性生殖のクローンで、全て雌。よって、

白人が黒人を蔑む等、とんでもない事。先祖に唾をかけるようなもの。

私など、東北人のクソ真面目さなのか、現実として、妻を泣かせるような浮気はした事はない。結婚するとき母から、きつく禁じられた言葉であった。がん4連発のため、私の寿命は知れたもの。そこでいつも妻に言っていることは、例えば私が直ぐ死んでも、隠し借金と、隠し子だけは絶対にならないから安心しな…と。

しかし、浮気の実行より、タチが悪い「心の浮気」は常習犯だ。長いことローマの休日のオードリー・ヘップバーンに憧れ、いつも頭から離れなかった。本当はこの方が罪深いかもしれない。但し、浮気は浅はかな文明が生み出した浅慮な概念であって、多少罪の意識があるが、火の玉になつて怒り出すような悪事とは思われない。故に浮気を深く考えてみれば、本来の生き物の必要不可欠の行動であると私は見る。色々の動物の行動を見れば、それが子孫繁栄の原動力となつていからである。

人間も所詮は、単純な野生動物に、ちよつと毛が生えただけの生物と考える。解剖学・生理学・心理学など学ばば学ぶほど、その信念は深まる。ホルモンなど、分子生物学から見れば、人間の行動は、全てホルモン支配で、他の動物との境界線等は全く無きに等しい。例えばオキシトシンというホルモンを注射すれば、ケンカ真つ最中の夫婦でも、すぐ仲良しになり、楽しいセックスを激しく続ける実験例がある。

そしてまた、人類の性染色体を見れば、男性のY染色体は、女性のX染色体の10分の1に委縮している。雄の哀れな存在。バカげた杞憂と嗤うか

もしれないが、この世から人類の「オス」が消えるのは時間の問題？

そんな状況にあるにもかかわらず、企業は危険な化学物質を無限に垂れ流し。人類の男性機能は、滅びゆく直前。大体にして男性の精巣が、卵巣並みに重要ならば、神様は宝物を股間などにぶら下げるような不用心の設計はしなかった筈。卵巣ほどに重要ならば、しっかりとこそこの骨で囲われた位置に格納する筈。そんな訳で、現在「貿易摩擦」など児戯に等しい騒ぎなど、している場合ではない。哀れなるかな自殺行為ばかり繰り返す人類とは、決して「知恵」ある生き物とは言えない。嗤い事ではないですぞ!!

*

さて繁栄の基準を「人口」で考えるならば、地球の人口収容能力の限界は50億人と言われる。しかし、現在の世界人口は75億人と推測されている。4人住めるサイズの家に6人住んでる計算になる。これでは窮屈で仕様がなからう。今世紀末には100億人が予想されている。結局、定員オーバーになれば、ギクシャクして、あちこちで、争いに発展する。

国と国が接触していれば、それ侵略だとか、難民だとか大騒ぎ。ヨーロッパ白人が、南北米大陸を侵略して、原住民9千万人の9割を殺害したといわれる。そんな悪事を働いた現在の白人を、私は許す事ができない。私は中米に赴任したとき、白人による南北米大陸侵略の様子を色々勉強した。白人のどこが偉いんだ？安倍首相がトランプ氏に、北朝鮮に対し、拉致した日本人をすぐ返せと言つてくれと頼んでも、北朝鮮は、アメリカはアフリカから何十万人も黒人を拉致したくせに、よ

くもそんなことが言えますね…と、突っ返されるの関の山。世界歴史において、白人の横暴は目に余る。

そんな事からも人種差別は酷いものであった。山際勝三郎東大教授は、兎の耳にタールを塗つて世界で初めて、実験的にがんを発生させた(1915年)。その功績に対し、1926年のノーベル賞生理・医学賞授与対象筆頭であったが、「東洋人にノーベル賞はまだ早い…」という事で見送られた。代わりにデンマークのヨハネス・ファイベルの、寄生虫による胃がん発生の発見が受賞した。ところが1952年ファイベルの報告は全く誤りであったということが、証明された。しかし、授賞が取り消されることはなかった。有色人に対する偏見の最たるもの。日本人初のノーベル賞初受賞は、1949年の湯川秀樹博士(物理学賞)。

諸悪の根源は人口過剰といえる。決まった面積しかないのに、そこに多数の人が集積すれば、一人当たりの縄張り面積が減少する。縄張り面積が少なくなれば、肝心かなめの安定的な食料を確保できない。一にも二にも生き物は食糧の安全確保が絶対条件である。現在日本の食料自給率38%は、政治が全くなつていない。輸出国が日本に何か不満があれば輸出ストップ。8人分の食料で10人なら、我慢すれば何とかなるが、4人分しかないのに10人で暮らすのは所詮無理なこと。なん十年もこんな状態が続いているのに、政府は一向に改善する気配がない。後の6人は死んでくれといっているのと同じ事。緊急の課題である。そんな国会議員を誰が選んだのか。一億総白痴化の列島だ。文明はそんなに急速度で栄える必要がない。ゆっくりでいいから、着実に、平等に、安全で楽しけ

れば、それで良い。全ての人が生まれてきた事を心から喜べる力が、繁栄の原動力である。

〔菅原氏は現在闘病中であるが、本原稿は本年1月に書かれたものである〕

我が労音史(13)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1983年の社会情勢と音楽状況

ポーランドの「連帯」(自主労組)のワレサ委員長がノーベル平和賞を受賞。大韓航空機がサハリン上空でソ連空軍機に撃墜され、乗員乗務員全員の260人が死亡。フィリピンのベニグノ・アキノ(野党指導者)がマニラ空港で暗殺され、フィリピンの民主化運動が一気に高まる。ビルマのラングーンで韓国の副首相・外相を始めとした20数名が爆弾テロで死亡。日米の首脳(中曽根、レーガン)の相互訪問で、「日米運命共同体」を強調。ロッキード事件の被告田中元首相に懲役4年の実刑判決。秋田県で起きた日本海中部地震が発生し、死者・行方不明者が150名。三宅島の雄山が21年振りの大噴火、全島民が離党避難。今村正平監督の「檀山節考」がカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞。東京デイズニールランドが開業、京都清水寺の大西良慶貫主(107歳)で亡くなった。

N橋が聴衆による日本作品への志向度を調査発表、日ファイルも聴衆の調査を発表。日本音楽家

ユニオンが誕生、反核コンサートが日比谷公会堂で開催され、京都・大坂・名古屋に波及した。日ファイルが東京地裁の和解案を受諾、芸大の奏樂堂は台東区の経費負担で存続が決定、この年CD(コンパクトディスク)の発売が始まった。この年に逝去された、音楽家・文化人は、Eマルケヴイッチ、大木正興、小泉文夫、山本薩夫、羽仁五郎、堀内敬三、井口基成、小林秀雄、寺山修司、Pプラド。

1983年の労音の動き

第31回総会は、労音会館で250人を集め開催され、労音を取り巻く情勢が分析された。

1) 企業による工業の著しい増加

「地域社会に音楽会を提供し、広く社会に貢献して、企業・商品のイメージを図る」ことを名目に、所謂「企業の冠コンサート」が大々的に展開している。主なイベント・音楽祭のスポンサー企業名を上げると、ヤクルト(みんなでコーラス)、ライオン、サントリ、ネスル日本、ヤマハ音楽振興会、日本楽器、全日空、ウエラ化粧品、ニッカウキスキー、コカ・コーラ、キューピー、資生堂、パイオニア、オーレックス、テクニクス、キリンビール、アサヒビール、カネボウ化粧品、ハウス化粧品、ポラ化粧品、味の素、ホンダ、etc、セキスイハウス、大和運輸など……。

2) 地方自治体(都道府県・市・区)による文化振興財団の設立とその活動

1978年に大平内閣が提唱した「田園都市構想」(文化は私事でなく公事である……)を受けて、1979年に自治省が「リージョンプラザ(地域広場)構想」として具体化を進めた。

3) 外来演奏家の氾濫とチケット販売の一元化
1983年4月からの一年間に来日した外人演奏家は155(人・グループ)と月平均12公演と凄まじい数に上っている。ある県の振興財団が外来オケのチケットを3000円で販売したが、半分も売れなかった例もある。これらのチケット販売を一手に握る「びあ」チケットサービス業務も此の頃から始まり、西武やセゾン、国鉄までこの業務に乗り出す構え。企業・政府・自治体・情報産業などが音楽業界進出によって、日本の音楽家・団体は疎外され危機感を強めた。このような中でも、音楽・芸能家、団体による入場税撤廃運動の再開や、日ファイル闘争の妥結(和解)など、前進的な動きもあつた。

総会では、新三ヶ年計画の第一年度の総括として、組織力量が前年に比して低下、併せてサークルからの例会組織率も低下していた、委員サークルの活動力や地域委員会の活動力が弱体化して、組織上の大きな問題点が指摘された。組織実態は、月平均5000名の会員と1000サークル。地域委員会を強化しサークルからの要求を聞き、総会方針をサークル・会員に伝える活動が重要な課題であると確認。そして、第二年度の課題は18000名の会員、3000サークルを目標として、各地域ごとに計画を立案し具体化を図り、地域例会・活動家の育成に取り組むことが決まる。総会議案書に記述された「30周年に当たって、労音運動を発展させてきた原因」は総会で論議され確認された。機関紙、ひびきには「東京労音30年、その歴史が教えてくれたもの」が掲載される。全国的に厳しい労音運動を打開するために、東京労音が果たす役割について検討し、東京労音の運営

体制を強化するため規約を改正し会長職を新たに設置し、それまでの石田委員長が会長に就任し、後任の委員長に木下明男が選出された。

この年のジェンコ(ソ連P)・Mルデイ(仏P)・Tシエバノワ(ソ連P)・Mカーノ(西G)が海外演奏家シリーズとしてセット方式で扱い、500名の固定会員を組織した。其々の演奏内容はマスコミ各社で高い評価を得て、音楽界に一石を投じた。労音招聘による海外演奏家は、Nデミ恒例の第九コンサートでは、秋山和慶指揮合唱団、若手ソリスト、前段の曲に中国の張曉輝氏による笛子協奏曲「雁南飛」が初演され話題を博し、3例会が満席となった。30周年記念例会として開催した「布施明コンサート」はプロジェクトチームが広く組織され、出演者と曲目構成を行い充実した例会内容になった。例会は4回で6800名が組織され、音楽界でも大きく注目された。他には、谷山浩子が厚生年金ホール2回を満席に、高橋真梨子(2回)や尾崎亜美が2000を超すキャパのホールを満席にしたのは、地道な活動をしたプロジェクトチームが役割を果たした。美輪明宏・高石友也とナターシャセブン・カーメンキャバレロの例会は高年齢層の要望に応えた例会として評価得られた。

伝統音楽例会では、平井澄子氏の「邦楽リサイタル」企画は、卓越した演目は披露され充実した音楽会になった。このような活動の教訓として、「例会の目的・内容を具体化し、サークル・会員の要求を引き出し、ひとりひとりを組織していく地道な活動が必要」と強調された。

委員会が創意工夫の模擬店が出され、長年の歴史を噛み締めながら友好を深めた。夏の友好祭は、労音大学を兼ねて富士五湖の西湖で開催、講師に両角憲二(厚岸水産高校の先生) 神戸孝夫(テノール歌手)を迎え、各労音の民族音楽教室(東京・函館・姫路。川崎) 交え、交流を深める。冬の友好祭は上越国際スキー場で、500名の参加者でNSPを迎え、恒例の雪上コンサートや火文字。松明滑走で賑やかに開催。

秋の全国会議は、淡路島の洲本で420名の代表を集め開催。地方自治体や大企業による音楽市場進出が急増し、無秩序な入場料金の設定が報告された。音楽の商品化に対向する労音運動の存在について「労音運動は人々の心を豊かにし、人間性を高め人間同志の連帯を育てていく運動で、将来に向かって日本の民族的・民主的な音楽の発展を追求する運動・・・」と討議を深め、厳しい状況を切り開く運動を、相互の協力で高めていくことを確認した。海外招聘の共同企画として、スペインからM・カーノ(フラメンコギタリスト)の取り組みとして、26名の労音代表を派遣。一方イタリアからベネチア室内オケとラウラデフスコ(P) 招聘のため、東京・大阪・横浜・九州から8名の代表団(木下明男団長)を送った。更に全国労音の招きで、イタリア北部のエミリア市から市長と文化担当官が来日し相互交流について話し合う。デミジェンコ(ソ連P)・Mルデイ(仏P)・Tシエバノワ(ソ連P)・Mカーノ(西G)が全国共同企画として取り組まれた。

この年に取り組まれた、フラメンコのM・カーノは、その後国際文化ギター協会(I・C・G)の結成に繋がり、ギター文化館の建設に繋がる!

国内演奏家の共同企画例会として、「布施明リサイタル」20回、労音制作ミュージカル「死神」の再演(夏木マリ・園田祐久主演) 13回が取り組まれる。全国の総会員数は69000人松前労音(北海道)が誕生。 つづく



石岡市指定文化財(十八) 兼平智恵子

十一月七日より石岡市ふるさと歴史館にて「舟塚山古墳とその時代」として企画展(令和二年二月まで)が開催されています。

世界遺産に登録されました大阪の百舌鳥古墳群、古市古墳群の話題が功を奏して、茨城県で最大を誇る前方後円墳、舟塚山古墳を見学なさる団体さま、マニアの方が多くなっています。

ふるさと歴史館で受付当番をしていると所在の確認、迷い迷いだどり着きました等と問合せがありますので、ここで道順をご紹介します。

石岡駅から徒歩で十五分位、駅前通り通称八間道路(又は御幸通りとも言う)を西に向って信号のある丁字路に進みます左角には、石岡市まちかど情報センターがあり、石岡の情報ほとんど得ることが出来ます。

丁字路(国道三五線旧水戸街道、右笠間方面、左土浦方面)を左折、すぐの信号を右に入ります。通称土橋通

り、真つ直ぐな道路丁字路まで進みますと石岡市民会館を背に陣屋門（一八二八建立、平成二五年よりの修復で新しくなっています）がお迎えいたします。左折しますと「舟塚山古墳とその時代」の案内板が目につき、矢印のとおり右に入り、石岡小学校の門をお入りください。右手に石岡市ふるさと歴史館到着です。

自家用車の場合も同じ道順でいらして下さい。小学校の門をお入り頂いて、駐車出来ませす。しかしお帰りの際には、土橋通りが一方通行になっていますので、陣屋門前をとり、左カーブし、石岡小学校の正門前（信号あり）を右カーブ、間もなく十字路交差点、左折は八郷地区柿岡方面へ、右折するとメーン道路、国道三五五線へ（香丸町交差点までお進み下さい）。

舟塚山古墳は大正十年（一九二二）に国指定文化財に指定され九〇年余り大切に保存されて来ました。巨大である為に古くから注目的になっていました。平成二二～二五年度に測量調査と物理探査が行われ、埋蔵施設や被葬者像、築造時期に関する手がかりが得られその紹介の企画展となっております。

ふるさと歴史館の開館は十時から十六時半、入場無料、休館日は月曜日（月曜日祭日の場合開館し、火曜日休館）。ご来館お待ちしております。前置きが長くなりました。今回の文化財は大乗妙典日本廻国供養碑 染谷二二二二

有形（歴史資料）

昭和五八・七・二八指定
染谷地区須賀田家に伝わる石碑です。

大乗妙典とは、私たち衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれる経典で、一般的には法華経、妙法

蓮華経をさすといわれており、その法華経には、誰もが平等に成仏出来るという仏教思想の原点が説かれているという。

そして、日本の六十六カ国の霊場に法華経を奉納して回った人が帰国後記念として、石塔や石碑を造立したのが廻国供養塔や廻国供養碑である。

石岡市教育委員会説明板によりますと——この碑に刻まれている六十六部（六部）とは、法華経を書写し、全国六十六箇所の神社仏閣を巡って、その法華経を奉納する行脚僧をいう。その起源については明らかでないが、中世から近世にかけて巡礼の流行にもなつて生じたものと考えられる。

伝承ではこの碑は、須賀田庄右門自ら日本廻国の成就を記念し、元禄七年（一六九四）に建立したものとされる。現在も、この辺りは六部台と呼ばれ、六十六部との関連が知られる。

大乗妙典日本廻国供養碑で詳細な日本地図が線刻されたものは全国的にめずらしい。——

尚見学の場合、個人のお墓の中に置かれてありますので、ご迷惑となりませぬようにご覧下さい。

また、実物より倍ほどの大きさで拓本として、石岡市ふるさと歴史館に展示されています。その当時の、ひたち、むさし、さがみ等日本列島に見事に線刻されています。日本地図を完成させた伊能忠敬誕生（一七四五年）前の日本列島の線刻、必見です。ご来館の折には受付の者に「大乗妙典日本廻国供養碑の拓本をみたい」とお申しつけ下さい。

○母も黄泉の国へ師も黄泉の国へ令和元年

智恵子

御留川一周の喜びを
分ち合いながら川守宅へ 伊東弓子

一周出来た喜びを強く思つての取りかかりだった。公的な駐車場を団体で使用する時は、一応話した方がよい事を前回学んだので、玉里支所、下高崎地区の恵比寿神社前、大井戸運動公園等を管理する所へ、前以つて話しておいた。これはよかったが終わつてからの報告はすっかり忘れ二か月も経つてしまった。

石岡から参加申し込んでくれた人（自転車）がなかなか来ない。きつと道を間違えたに違いない。気にはなるが時間も過ぎ、眼に前の神社へ来てくれることを願つて移動した。教えてあげる時の親切さが充分でなかった事を反省している。

資料の表紙は、明治十七年迅速図国土地理院蔵国交省霞ヶ浦河川事務所土浦出張所提供の色刷の物の一部を使う。玉里御留川、御川筋の絵図で江戸時代の姿が確り残っているものだと、先生からも以前聞いたことがある。一地域毎に歩いた日々が蘇ってくる。

大宮神社について官主さんの返事がない儘今日に至つたのは残念だが、私なりのお粗末な説明と資料で補つて貰う事になった。境内にある碑は各部落から引宮したものから、戦後建立された太平洋戦争にまつわる物もあった。社殿に向かつて両側に並んで人を寄んだ露天商の賑わいも、相撲で人が集まつた摺鉢上の客席も松から杉に変わった森に包まれているだけだ。祭りも時代と共に変わった私の知っている、子供の頃から青春時代の祭り、生活改善運動の一環として勤労感謝の日に近隣町村の祭りがまとめられた事で、人の行き来も

滅り、神も忘れられ、時代に押されて消えていったが、魔神祭という形で八月末に復活し行われている。立ち上げた人々に感謝したい。

「玉里八景」の事も、一つ一つ意識してみたのは今回だ。玉里の長い歴史と雄大な自然を物語る場所が八か所出来れば一ヶ所毎に案内出来るとういがと思いつながら次へ向かった。

滝平家に向かう途中、恵比寿神社（西宮神社）に寄った。今は見る影もないが松風と波が打ち寄せる様は遠い昔。旧十月十日は大網漁の始まる舟祓いの神事が行われる場所であった。その際神事を司るのが江戸時代大宮神社の官主をしていた滝平家であった。神事後、綱おろしをし綱引きをした、その様子が以前の資料の中にも色彩かに描かれていたのを渡してある。又御留川を巡る論争では扱人となり、当事者双方の間に入り調停し、内済させる役割を果たしていた。滝平家で話を聞く予定だったが、お邪魔する二〜三日前、庭の掃除をしていた奥さんが蜂に刺され医者に行く程酷い状態で休んでいるとのこと、若奥さんが頼まれ印刷物を持って話してくれた。（滝平主殿の碑）は、屋敷東側の小高い所にある。その碑文を訓点された秋永毅、読下しされた池上和子両先生の作られた資料をいただき、又の機会にお話しを頂けるようお願いした。頂いた飲み物など、手渡している所へ、遅れたK氏が追いついて参加したので一安心。時代を替えようとして志しを持った人々が、信濃路の厳しい冬の山野を京に向かった苦勞を思うと、今の私達の生き方は・・・とどうだろう。郷校の跡地にあった小川小学校は移転した。今後どんな姿になるのだろう。人を育てる施設であって欲しいと願う。

今回私なりの発見があったことをしるしてみた。滝平家は元は大井戸須賀の方にあったという。先日のご縁日のお茶の席での事だった。どの辺にあつたのか、いつ頃だったのかはわからないが、前々から懐いていた事がつながつた。三十年も前に子供と平山地区の盆綱を見に行った時のこと、藁の童は山口さん宅からUターンしてしまった。その時の話しては「先は官主さんの家だから・・・」と聞いた。それから川中子、大井戸、岡、全体になるのに何でこの地区には盆綱の行事はないのか疑問だったが、官主宅に気を使った昔の人が盆綱の行事を行わなかったのだろうとの話しだった。日頃心にかけていなければ必ず見えてくるものがあると思つた。

愛宕神社から十六日川の関連を取り入れて又、次回につなぐ場所でもあるので、何回目かになるが寄ることにした。鬱蒼とした森は古代から御留川時代へと信仰の大地であり、十六日川の出来事も夢物語ではなく現実の生活そのものだと思う。下がって行くと蓮田の中を走る。海の一部だった長い歴史から御留川の大切な施設を備えた場所だった十六日川、終戦後は早くも堤防が出来、水田とし稲作増産のための歴史をつくり、やがて大漁の養豚場となつた時は垂れ流しという汚名がついた。その後、大井戸運動公園となり、市民の安らぎの広場となつた。入口駐車場傍に化粧室（便所）があり、一面の芝の南端に東屋がある。この地区の要望と当時この公園を考え合つた委員さん達のことを思い出す。あれこれ建物を建てず、自分達で楽しさを、安らぎを作り出す所にしたと頑張つて主張してくれたそだ。

鈴木家へ納屋場の活潑に、女池から流れていた

きれいな水の水路近くを走つて川守宅へむかつた。当主のお母さんが待っていてくださった。暑さとそろそろ疲れの出してきた時、お母さんの歓迎の言葉と冷えた飲み物をいただきながら、お話に耳を傾けた。

「お疲れ様、本当に御苦労さまでした」の言葉の中に、一人の娘がこの地の旧家に嫁ぎ、この家を背負い、農業に身を粉にして働き、世間との付き合いをし、家族を守つてきて年を重ねた人間の暖かさを感じた。舅と一緒に野良仕事をしていた時に、家のこと、先祖のこと、行事のやり方、大切な品々について話しを聞いていたことがお役にたてる喜びだと話しは続いた。皆さんに足を運んでいただいで、知つていただけた事が喜びですと、先祖も当時の苦勞を労つていただけたと喜び、聞いていることでしょう。池上先生が世に出してくださったことも重ねてあげたい。常にかかわつた人達へ、尋ねてくださる人達への感謝を忘れない方だった。古い佇まいの屋敷内を見せていただき、無事一周の終えたことに有難く思えたコースだった。

多少、便の悪いと思うかもしれないが、大切に思つて守つてほしい里山と谷津田の道を帰って行く中で、歴代十二人の川守を勤めた方々を紹介し、大役を果たしてきたご苦勞をしのんだ。そして忘れてはいけない私たちの先祖や漁民がこの地で確り生きてきたことを再確認することで、今が分り、先どうあるべきかが見えてくるのだろうと、付け加えたい。

池上先生！　そうですね。一周することが出来ました。さあ！これから私たちはどこへ行くのか、何をするのか思っているものを暖めよう。

終りに近くになるにつれ、空しいものを感じるようになった。会員の参加が少なくなったのを感じる。会そのものの魅力がなくなったのか。私のリーダーとしての資質に欠けるのか。それぞれが忙しく日を送っているのか。家庭的や体が思うようにいかなかったか。かと言って発破かける自信もない自分に原因がある体力がなくなった。体型が変わった。老人そのものになった自分を知るからだろう。

N P O 法人キドックス

小林幸枝

私の犬好きな友人から、保護犬と出会えるカフェ「キドックスカフェ」の情報を頂き、早速、行って見ました。

キドックスは、色々な事情で飼い主がいらない犬たちを預かり、もう一度本当の家族を見つける為の活動をしています。

玄関の出入口では、スタッフ犬と保護犬が迎えに来てくれました。他に犬は3匹がいましたが、皆、無駄に吠えないし、大人しい犬たちでした。訓練された保護犬がドッグカフェでお客を癒す役目を務め、お客とふれあう場となっています。

もうひとつこのカフェでは、若者が社会で自立するための基礎力を身につける場と犬が社会で幸せに暮らすための場が共存され、心を閉ざした若者が社会へ復帰できる活動と、保護犬の里親探しへ貢献する活動に取り組んでいます。

私の夢は、「捨て犬や野良犬と保護犬を育てて幸せに暮らしてあげること」また「ドッグランを作り上げたり、または、聴導犬と盲導犬と介助犬などを指導、育成すること」、「災害救助犬なども訓練して役に立ちたいこと」などです。

保護犬と出会えるカフェ

「キドックスカフェ」

つくば市吉瀬 511-5



カフェ営業日、時間

月曜、土曜、日曜、祝日

11時～18:30 (L.O 17:30)

(注)、臨時休業の時、ありますので、カフェHPでご確認ください。

父のこと(16)

菊地孝夫

我が家のことをあれこれと調べているうち、幾冊かの面白い本と出合った。古いことを調べていくと、それに関連して幾冊かの本の名前が出てくる。

読書の楽しみの一つは、思いがけない本との出会いというものがある。(これは読書に限らず、映画や音楽であつてもいいことかもしれない。)

そのひとつが、

「常陸旧地考」というものである。

原本は、和綴じ八十枚ばかりの墨書の本で、作者は、鬼澤大海という高浜の人である。

書かれたのは、文政十二年(1829)というから、今からおよそ百九十年前の事になる。

明治初めまで生きた人で、80歳を超えて当時としては長命だったと言える。主に常陸の国の地名の由来を書いていて、ほぼすべての地名が載っている。全くよく調べたものだと思う。

その頃の書物なので当然、旧仮名旧漢字で、古事記、和名鈔、万葉集、常陸国風土記、など数十冊からの引用なので、万葉仮名などがあつたり、当て字、略字なども交じっている。時には崩し字なども混ざり、文語体で書かれているので、初心者には読解に苦労する。

手にした本は、影印本である。数か所、後から手を入れた跡が残っている。すでに木版印刷が行われていたので、いざ出版しようと考えていたのだろうか。(よく見ると、書体などから、原本ではなく、書写本のようにも思える。)

これだけの書物であるけれど、あまり世には知られていない。

ひとつには、常陸の国、一国という限られた地域の事なのと、写本が少ししかなかったことが考えられる。

尊王攘夷の運動が起こり、国学が隆盛を極めるのも、これより3、40年あとのことになる。また、当時主流を占めていたのは、漢学と呼ばれた儒学などで、そろそろ、洋学も台頭してきていたことも響いているかもしれない。

インターネットで、名前を検索すれば、これらのことがたちまちに見ることが出来る。

いまは技術の進歩により、誰でもこれらの情報をたやすく手に入れることができるようになった。

便利な時代になったものだ。これらのテクノロジは進化し続けて、昭和の時代に生まれたものか

ら見ると、理解を超えたものになりつつある。便利さは同時に、危険なものもはらんでいるけれど、資本の論理はそれをすつ飛ばして、行きつくところの着地点が見えなくなっている。うまく着陸してくれるのを祈るのみである。

先日は、恒例となっている、風の絵ことは絵展が開かれた。

人類が誕生した古代、狩りの獲物を壁画として残した。それは、文字の発明よりはるか以前の事になる。

それから数万年という長い時を経て、絵が象形文字となった。その一つが漢字であるの言うまでもない。そこから派生したひらがなも使って、こうして文章を書いている。

遙か昔の世界では、わざわざ文字などを使って人に何事かを知らせる必要はなかった。せいぜい数十人の家族単位の小さな集団が、点在していたのだらう。

ここ、後に常陸の国と呼ばれるようになったところも、西方からのヤマト国家が進出してくるまでは、のんびりと暮らしていたらう。

農耕などは行わず、木の実を採ったり、魚を取ったり。戯れに魚や、鹿の絵を描いたりしたかもしれない。

古代中国で、あちこちに中央集権国家が成立して、定住して農耕がおこなわれ、租税が徴収されるようになる。当然、人口や田畑の面積などを記録する必要が出てくる。象形文字だけではまにあわなくなり、もっと抽象的な概念も記録し表現する必要が出てくる。数字にしたって、百、千、せいぜい万くらいあれば充分間に合った。

支配者は、その血統を記録する必要が出てくる。それによって正当性を証明し、権威づけた。

多数の間を支配するには、複雑な機構が必要になる。そのために官僚制度が生まれ、発達した。文字はやがてその実用性からはなれ、詩歌が生まれる。花鳥風月、恋の歌。

大陸から輸入された文字によって、この地方で行われていたカガイが、吾妻の歌垣として、西方の中央国家に伝わる。

月の夜、大勢が食べ物や飲み物を持ち寄り、広い野原に集まっては歌をうたって、互いに呼びかけ、男が女に贈り物をし、女がそれを受け取れば、そこに婚姻関係が成立する、というのは新鮮な感覚だったようだ。

遠く離れた関東のいわば「植民地」の連中が、なかなかしやれたことをやっているなと思ったのだらう。

常世の国かどうかは知らないが、心地よい風に吹かれ、浮世のわずらわしさから遠く離れて気ままに恋愛できる。

朝廷での政争に明け暮れる貴族たちにとっては、まさに憧れの国であったようだ。

カニの恩返し(昔話) 木村 進

「今はむかし・・・」で始まる今昔物語や、御伽草子には私たちが知っているお話がたくさん載っています。

今昔物語は平安時代末期に成立したとみられ、全31巻(うち3つは欠)あるそうです。

また御伽草子は鎌倉時代末期頃に書かれ、一寸

法師や浦島太郎に酒呑童子などお馴染みの話が載っています。また、この話が基になったとおもわれる地方に伝わる民話や昔話がたくさんあります。

最近もつと前の平安時代初期の「日本霊異記」の一部を読んでみました。これらは皆、仏教的な「説話集」といえそうです。

地方のふるさと昔話などについて書いたりしましたが、どうもこれらの話や、中国の話などを調べてみればかなり共通した話が時代などや、その地方などでいろいろに姿を変えていそうに思えます。

地方に伝わり、その地方の言葉で語られたものは、その地方でしか表せない独特の響きや、そこに根付いている生活が伝わってきますね。でもその話の元の話も知っておいて悪いことはないでしょう。

そんな点で、気がついたことをこの場に少しづつ残しておきたいと思います。

最初は「カニの恩返し」です。

地方に残る昔話をネットで探してみました。

① 山形県の民話(元記事…フジパン提供) 『蟹の恩返し』

昔、あるところに一人の爺様(じさま)がおって、前千刈(まえせんかり)、裏千刈(うらせんかり)の田地(でんち)を持っておったと。

その爺さまに一人の気だてのいい娘がいたと。娘は毎日、鍋釜(なべかま)を井戸で洗うのだが、そのたびに、井戸に住みついた沢蟹に、洗い落としたりご飯粒を与えて可愛がっていたと。

ある春のこと。娘の家では大勢の田植え人を頼んで、田植をしたと。

娘は田植の小昼飯（こひるめし）に、黄な粉をまぶした握り飯を作ったと。稲の穂が黄な粉みたいに黄金色に稔るように願ってだと。

その握り飯をひとつ、井戸の蟹へ呉れてから田んぼへ持って行ったと。

そしたら、田の中道（なかもち）で、大っきな蛇が通せんぼしたと。そして、「オレの嫁になんねえと、田に水をかけてやんねえぞお」というのだと。

娘はびつくりして、「おつかねちゃあ、誰か助けるやあい」と叫んだと。が、誰も来ない。

しかたない、握り飯を投げつけて逃げ帰ったと。

大蛇は、その握り飯をストンストン、みんな呑み込んでから、「今度（こんだ）あ、あの娘は呑む番だ。待でえ」といつて追っかけて来た。

爺様、娘の語る訳聞（わけき）いて、すぐ、蔵の中の石の唐櫃へ、娘をわらわら隠したと。

追っかけて来た大蛇は、火イみたいな赤い舌をペロラペロラ吐いて、「やい爺様、ここさ娘が逃げたべ。隠したて、だめだ。オラすっかり分つてんだ」といつて、すぐに蔵の中の唐櫃を見つけて、グルリ、グルリ七周り半も巻きつけたと。

石の唐櫃が熱（ねつ）もつて来て、中から、「あついちや、あついちや。助けてけるやーい」と、娘の叫ぶ細かい声が聞こえたと、爺様が、「やめれ、やめれ」と、おろおろしてたら、井戸から、大っきな蟹が出て来て、ガサラ、ガサラ蔵の中へ入って行ったと。

そして、大っきなハサミで、大蛇をバツキン、バツキン切りにかかったと。

大蛇も蟹にからみついて、ギリギリ締める。

バツキン、ギリギリ。ギリギリ、バツキン。

大っきな蟹と、大っきな蛇が、全力かけて戦った

と。

そのすきに、爺様は娘を石の唐櫃から出して、逃げたと。

戦いは蛇が負けて蟹が勝ったと。したが、蟹もくたびれ切ってハア、ついに死んでしまったと。

爺様と娘は、「カニ観音」をつくって、その蟹を祀（まつ）ったと。

こんなことがあるから、弱い生き物をも大事にしなければならぬんだと。

「情けは人のためならず」ってな。

ドンピン、サンスケ、猿の尻（けつ）。

② 福岡県（フジパン提供）

昔、筑後（ちくご）の国は三池（みいけ）の里に、今山（いまやま）というところがあつて、殿さんの大きなお屋敷があつたんやと。

その殿さんには大層（たいそう）かわいらしい姫さんがおらっしゃった。

あるとき、姫さんがお屋敷内（おやしきうち）の大きな池のほとりで遊んでござらっしゃると、なにやら、ムザリ、ムザリ動くもんがある。

「あれえ、ちいっちゃいカニじゃ。手足もこんなにやせてえ、たよりなげやなあ」と言つて、お供の者に頼んで、そのカニにごちそうをやらなされた。

カニは、それから毎日、姫さんが池のほとりに来るのを待つとつて、ごちそうをもらうておつたもんだから、一日、一日大きゅうなつていったんやと。

あるとき、お屋敷中のみんなで今山の花見に出掛けなはつた。

殿さんも家来（けらい）たちも、花や酒に酔つ

て浮かれて、そりやあもう、にぎやかなこつさわぎまくつておんなさつたと。

そんなすきに、姫さんな、ひとり、ふらふらと離れて小川の淵までやって来なはつたんじやと。

淵に寝ころび、足を流れにつけて、チャップリ、チャップリ遊んでおらっしゃった。

そんなとき、一匹の大蛇（だいじや）が、草にまぎれて姫さんに近づいてきよつた。

姫さんな、むじやきにしようて氣い付かないんやと。

すぐきわまで近づいた大蛇が、カマ首を持たげて、そろそろ姫さんの首へ咬（か）みつこうかというときじやつた。

えらい大きなカニを先頭に、たあくさんのカニたちが、どこからともなくあらわれて、大蛇めがけて飛びつて行った。

さあ、姫さんな、びつくりしなはつたわ。見れば、おつそろしか大蛇じやもん。それに何万匹というカニたちが、まるで阿修羅（あしゅら）のごと、戦つとるんじやもん。

けんど、ほどなくして、大蛇が三つに切りとられて、はげしゅうのたうちまつた。

三つの身イそれぞれが、真っ赤な血ば吹き出しながら土の中にのめりこみ、みるみるうちに血の池を三つこさえた。

大っきなカニは、姫さんがごちそうをやつとつたカニじやつた。

こんなことがあつてからというもの、今山の衆は、どげなことがあつても、清水（しみず）のカニだけに手もふれず、食べもしないで大事にするようになったんやと。

それぎんのとん。

③ 今昔物語 【蟹満寺縁起】(蛇婿入りー蟹報恩の物語)(今昔物語集卷十六・山城国女人依観音助通蛇難語第十六より)

今は昔、山城の国久世の郡に住む者があり娘がありました。

娘は七才の頃より観音経を習い誦誦し、毎月十八日には身を清め観音菩薩を念じ拝みました。

十二歳になる頃、ついに法華経一部を習い覚え、幼い心ではありましたが、慈悲深く人を想い、悪い心など起こす事ありませんでした。

娘はある時、道端で蟹を荒縄で縛り歩いて行く男と出会いました。

蟹は足を縛られ、苦しうに泡をブクブク出していたのです。

娘はその男にその蟹をどうするのか尋ねると「帰って食べる」といいました。

娘は悲しくなり、家にはたくさん魚(死んだ)がありから、その魚と交換してほしいと頼みましました。

男は承知して蟹を娘に渡しました。

娘は家から魚を持ってくると魚と蟹を交換し、蟹を川へ放してやったのです。

それと同じ頃、この娘の父親が田んぼで作業をしていると、あぜ道で大きな毒蛇が大きな蛙を飲もうとしていました。父親は慌てて止め、毒蛇に向かつて「待ってくれ。その蛙を放してやってくれんか?」といいました。

しかし、毒蛇は言うことを聞かずに更に蛙を奥まで飲み込もうとしたのです。

父親はあわてて、「もし蛙を放してくれるなら、私の娘と結婚させて私の婿にしてやる」といって

しまったのです。

すると大きな毒蛇は蛙をはなし、藪の中へと消えていったのです。

父親は「わしはなんと言う事を言ってしまったのじゃ」と後悔し、家に帰っても食事ものどを通らず打ちひしがれていました。娘はこんな父の様子を心配して父に尋ねると、父親はようやく重い口を開いて毒蛇との約束の話を娘にしたのです。

それを聞いた娘は、「心配しないで、何とかありません。」と気丈にいい、何事もなかったようにしていました。

するとその夜、午後十時頃になり、家の門をたたき音がしました。娘は父に、「あの毒蛇が来たら婚姻の支度に時間がかかりますので、もう三日待つて下さい」と伝えさせたのです。

毒蛇そのことを伝えると、三日後にまた来ることを言い残してその日は帰って行きました。

その後、娘は家の中に頑丈な板で蔵をつくらせ、三日目の夕方にその蔵の中に入り、観音様にご加護を祈っていました。すると夜になって約束通りに毒蛇がやって来ました。

毒蛇は娘がだましたと知って、蔵に巻きつき、しっぽで戸をバンバンとたたきはじめました。

蛇の胴は蔵を締めつけ、ギユウギユウに締め上げてきました。

蔵の中では恐ろしさに震えながら娘は法華経を唱え、観音様を念じて一晚を過ごしました。

そして夜がもう明けようとする頃に娘の前に一人の僧が現れ娘に次のように告げたのです。

「娘よ、恐れる事は無い。いかな蛇、ママシ、とかげ、さそりの煙火のような毒であろうとも、

観音の力を念ずれば、その声とともにたちまち逃げ去るであろう。」

するとそのすぐ後に、蔵の廻りからザワザワと何か別のものが沢山寄ってくる音が聞こえました。そして、その後、蛇の身をよじる音が聞こえ、蛇の姫異なよう直人が聞こえてきて、やがて静かになりました。

すっかり夜が明け、娘は蔵の戸をそっと開けて外に出ると、そこには何万匹もの蟹がいたのです。

そして大きな蟹がああ毒蛇の頭をはさみで押さえ込み、無数の蟹が蛇の体にまとわりついて毒蛇をはさみ殺していたのです。

大きな蟹は娘の姿を見ると蛇の頭を放し沢山の蟹を引きつれ静かに去って行きました。

娘と両親は蛇の遺骸を埋め塚とし、その上にお寺を建てました。

蛇の苦を救い、多くの蟹の殺生の罪を償うため、仏像を造り経典を写し供養したのです。

その寺は今も残っており、もとは蟹満多寺(かにまたでら)と言いましたが、人々はその由来を忘れたのか、今は紙幡寺(かみはたでら)と呼ばれています。



この今昔物語は平安時代後期の1130年頃にまとめられたものといわれています。

④ 日本霊異記(平安時代前半…800年頃)…
霊異的な仏教説話

(講談社文庫の日本霊異記(中)(中田祝夫訳))

「蟹と蛙との命を買って放生し、現報を得し縁」
(第八)

置染臣鯛女(たいめ)は奈良の都にある富の尼寺の上席の尼、法邇(ほうに)の娘であった。

鯛女は仏道を修行しようとする心が非常に堅固で、まだ一度も男との交渉はなかった。

そして、行基菩薩に捧げる野の菜をいつも心をこめて採り、一日もかかさず師に奉仕していた。

鯛女は山に入って菜を採っていた。見ると大きな蛇が大きな蛙を飲みかけていた。

そこで大蛇に頼んで、「蛙を許してやってください」といった。

大蛇は聞き入れずに飲み続けた。そこでもう一度お願いして、

「わたしはあなたの妻となりましょう。わたしに免じて許していただければありがたい」

といった。大蛇はこれを聞き、頭を高くもたげて鯛女の顔を見つめ、蛙を吐き出した。鯛女は大蛇と約束して、

「今日から7日たったら来なさい」

といった。そして約束の日が来たので、戸を閉め、開いている穴をふさぎ、鯛女は身を引き締めて部屋に籠っていると、ほんとうに大蛇は約束どおりに来て、壁をたたいた。

鯛女はすっかり恐ろしくなり、次の日、行基菩薩にこのことを申し上げた。行基菩薩は生駒山に住んでおられた。

「お前は逃れることはできないだろう。ただただ仏の戒めを守っているがよい」といわれた。

そこで仏・法・僧の三宝をあつく信じ、五つの戒律を受けて帰ってきた。

と、道に見知らぬ老人が大きな蟹(かに)を持っているのに会った。

「どこのお爺さんですか。どうぞわたしにその蟹を譲ってください」と頼んだ。老人は

「わたしは、摂津国兔原郡の者で、画問邇麻呂(えどいのにまろ)というものである。

年は78歳になるが、子もなく孫もなく、生きていくにも方法がない。

難波に行つて偶然この蟹を手に入れた。だが約束した者がいるので、お前さんにやるわけにはいかない」といった。

鯛女は上衣を脱いで代金としたが、やはり聞き入れない。次に裳(も)を脱いでこれを加えて買おうとすると、老人は承諾した。

そこで蟹を受け取り、ふたたび生駒山に帰り、行基菩薩にお願ひし、呪文を唱え、祈願をこめて放してやった。行基菩薩は、

「尊いことだ。善いことだ」と感嘆された。

8日目の夜、ふたたび大蛇が来て、屋根に登り、屋根のかやを抜いて入ってきた。

鯛女は恐ろしさにぶるぶる震えていた。そのとき、ただ床の前で跳ね上がり、どたばたと大きな音を聞いた。

明るく日見ると一匹の大きな蟹がいた。しかも大蛇はずたずたに切られていたのであった。

そこで、これは鯛女が買い取って放してやった蟹が、鯛女の恩に報いたのだとわかった。しかし、また、これは戒律を受け守ったためでもあったのだ。

この話の真偽を確かめようと思い、さきの老人の姓名を尋ねたが、その老人にはついで会えなかった。

ここではっきりとわかった。老人は聖者がかりにこの世に人間の姿をして現れ出たのであったということが。

まことに不思議な話である。

日本霊異記にはもう一つ、「蟹と蛙の命を買い取って放し、現世で蟹に助けられた話 第十二話」

の話が載っていて、ここには、娘が8匹の蟹と大きな蛙を助け、8匹の蟹が蛇をずたずたに切ったという話が書かれていて、今昔物語の話はこちらの話に近いかもしれません。

さて、奈良県木津川市にある「蟹満寺(かにまんじ)は今昔物語にその寺の名前が出る古いお寺で、この今昔物語が寺の縁起となつています。奈良県ですが京都府との境に近く、奈良から京都に行く中間地点にあります。この寺では、現在、毎年4月に蟹供養がおこなわれています。

蟹満寺は1988年に発掘調査が行われ、飛鳥時代の後期(7世紀末)頃に創建された寺院であったと推察されています。

発掘調査の結果、ここには大規模な寺院建築の跡が発掘され、その規模としては、本堂が奈良の薬師寺の金堂とほぼ同じくらいの大きさの建物で

あつたと見られています。

今まで平安時代の創建と思われていたこの寺でしたが、この発掘調査により、出土瓦の同範瓦との比較から、創建時期は、高麗寺瓦よりも古く白鳳期である680〜800年前後ではないかと推定されたのです。

また寺の創建には朝鮮半島からの渡来人集団である秦(はた)氏一族が係わっていたと考えられています。秦氏といえ、聖徳太子に仕え京都太秦(うずまさ)にある広隆寺を創建した秦河勝(はたのかわかつ)が有名ですが、中国の「秦の始皇帝」の末裔を自認していたといわれています。

この今昔物語に書かれている寺の名前については、「その寺は今も残っています。もとは蟹満多寺(かにまたでら)と言いましたが、人々はその由来を忘れたのか、今は紙幡寺(かみはたでら)と呼ばれています。」とあります。

これから昔は「紙幡寺(かみはたでら)」「加波多寺(かばたでら)」「などとも言われており、「蟹満多寺(かにまたでら)」「などと呼ばれていたことがわかります。

現在の寺のある場所の地名は「綺田(かばた)」といえます。この読み方は「カニハタ」「カムハタ」と発音されていたようです。そしてそれが、「蟹幡」「加波多」などと表記されていました。

そして奈良時代、平安時代などより伝わる仏教説話の中に登場する蟹の恩返しの説話が今昔物語などのお話となり、この寺の名前の「カニ」という名前に結びついて語られるようになったと考えられます。

また地名由来から考えると、この地は「神(カム)」と織物を意味する「幡(ハタ)」から「蟹幡(かむはた)郷」となったと考えられ、これからも古代に、渡来系民族で織物にたずさわる人が多く住んでいたのではないかと推察されます。

平安時代以降は、今昔物語集に出てくる「蟹の恩返し」縁起の寺として有名になりましたが、あまり資料が残されていないために詳細は不明です。しかし、江戸時代の二十二年に真言宗知山派総本山である「智積院(ちしゃくいん)」の僧・亮範(りょうはん)が再興しましたことが記されています。

この亮範は越前(現福井県)出身の僧ですが、京都東山の智積院から江戸へ出て、將軍徳川綱吉の帰依を受けて江戸に智宝寺を開き、この蟹満多寺を再興して智積院の15世となっています。

創建当時の本尊は山号の普門山などからも「観音菩薩」であったと考えられますが、現在の本尊は国宝の白鳳仏である(銅造)釈迦如来坐像です。素晴らしい仏像で、なぜこの寺に残されているのが良くわかっていないのです。

ただ、この釈迦如来像(国宝)はかなり前よりここに安置されていたのはたしかであり、発掘調査では台座の位置から像の制作時から現在の場所に安置されていたと考えられています。

しかし寺伝では本像は綺田の東方山中にあった浄土宗の大寺院・光明山寺から移されたものともいわれています。

どうでしょう。色々な話が伝わっていて面白いですね。仏教説話と考えると、観音信仰が民衆へ広がりだし、このような説話が語られ、少し一般

向けの話としてアレンジされて広がっていったものなのでしょう。蛇が悪者で蟹や蛙が善であるというのも何時ごろからの信仰なのでしょうか。

また、古事記などには、三輪山伝説などといわれる蛇や龍が美男子に化けて娘と結婚して子供が出来るという話があり、日本全国に、その話があるいろいろな変形話として伝わっています。これらの話では蛇や龍は神様とされています。

蛇は善者なのか悪者なのか、皆さんもいろいろな想像して楽しんでみてくださいね。

また地方に伝わっている昔話は、その地方の言葉で語られますのでそこに独特の味が出てきますね。

話しのルーツを知ること大切ですが、その地方の言葉も大切に残して行きたいですね。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし(34)

さと女

生垣の金木犀がいい香りを漂わせている。この香りが漂う頃は大秋柿も食べ頃。知り合いの柿農家さんへ遊びに行った。大秋柿は人気であちこちから注文がある、さくさくとした歯ごたえに、大変甘く美味しい

●コロちゃんか・・・

・秋の風に誘われ、金木犀の香りとともに、愛犬コロちゃんが逝ってしまった。今頃は、かつて一緒に暮らした猫ちゃんたちとじゃれ合っている

き・・・なので電車で行くことにした。それにしても水戸駅の変わりようには驚いた。普段は土浦イオンを利用していたが、この映画館だと電車で来られる。早速会員登録をした。今回の目的の映画は「マチネの終わりに」全編にクラシックギター曲が流れて、切なく哀しい大人のラブストーリー。知らず知らずのうちに涙が流れ、久しぶりに感動的な映画に出会った！

● 諸々・・・

・サンリオピューロランドに、サンリオファンの子の案内で初体験、フワフワの世界をめぐるショーやミュージカルを見て最後はサンリオショップに、びつくりするほどグッズが売れる。そういうえば姪の家も、姪の娘の部屋に、飾り切れないほどのグッズで溢れていた。どれも思い入れがあり大切なものと話していた。すごい世界だなあ・・・？

・朝から冷たい雨、今日は石岡のおまつりで3日間、袴の着付けをしてくれた、かもさん夫妻をお誘いしての食事会。映画の話が尽きません。かもさんは着物姿、お店のママさんは大の着物好きでお出かけはいつも着物だとか、今度着物で集まるうなんてまたまた話がもろあがって・・・
・こんこんギャラリーへ行つた、気になる場所でありながら、足を運んだことがないというので、みんなでおじゃましました(エコクラフトを1時間繰り上げて)。会場は大森さんの花の世界。素敵なりースやオブジェが飾られその中に竹の師匠のつたの花入れと大森さんとのコラボ作品が何ともおしやれに飾られていた。入口に飾られた秋の野の花も優しかったですね・・・

・甘い香りにつられて行くと、枝の花が咲いていた。まるで雪のように真っ白に・・・？冷たい連日の雨、11月から12月上旬の山茶花の咲くころの連続した雨を「山茶花梅雨」というらしい。今、山茶花の花は満開、花びらが散って足元を染めてくれた・・・

《風の吹き》

冗話オンパレードその①

菅原茂美



どうやら私は聖物の様に見られているらしいが「小便する だけの道具と なりにけり」と来ては、脳ミソの方も柔らかくしなやか。

◎ド近眼の私の友人Y氏は、すごい記憶力で、囲碁5段。視力検査の折、検査表の文字の位置を殆ど暗記。万全を期したが、いざ検査が始まったら検査員の指す棒の先が見えなかった。慌てたカンニングも徒労に帰す。

◎ある農協の職員。大農家の御曹司。長男故、この大黒柱の様にしつかりしろ...と言われて育つた。しかし、どこへ行っても超ノロマ。歳をとるに従い会話・行動、皆異常。そうしたある日、大黒柱に向かつて、『てめーのために俺がどんなに苦しんだか知ってつか？』と怒鳴りながら、鋸を持ち出し、大黒柱をギーコギーコと撫で斬り。汗を拭き拭き満足顔。

◎私が大学寮に入った時、真っ先に先輩から受けた教育は、畑からリンゴをかつぱらって来い。も

いだリンゴはリュックに詰め、上を縛って逆さまに背負え。監視員に見つかつたら、紐を解きリンゴを捨てて、素早く逃げろ。

◎ある村の老齢徘徊者。近隣の皆が集まり、山など搜索したがついに見つからず。翌朝なんと高圧鉄塔を囲むバリケードに、着物がアチコチ引つ掛かり、大の字に手足を広げ、身動きできず、一夜を過ごしたらしい。

◎私の知っているある夫婦。なんと3回も、奥さんと離婚・再婚。浮気相手に『奥さんと別れたら結婚してもいいよ』と言われ、すぐ本妻と離婚。折角離婚したら『やーだよ』と逃げられた。凝り性もなく、その繰り返し。

◎現役時代私は、車2台8人で宮古市の浄土ヶ浜国立公園へ到着。渋滞など考え土浦を前日午前出発。スイスイ走つたら、翌朝5時前に着いた。空腹だが店は開いていない。やむなく自動販売のカモメの餌のパンを買い、カモメにやったりしていたが、試しに食べてみたら、ワカメが入っており、とてもおいしい。全部買い占め、腹ごしらえ完了。次へ出発。

◎ちよいと下ネタ話。私は10年くらい県庁や水戸の出入へ電車通勤。下り友部駅へ電車が付いたら、多数の客の中に、背が高くすらりとし、白いパンタロンの美人が乗ってきた。どういう訳か私の目の前に立つ事になり、座っている私の目の前に彼女のヒップが位置。失礼にならぬよう眼を細めてよく見ると、パンタロンのチャックが、一本の陰毛をしつかり食い込んでいる。空気の動きでユラユラ。白と黒の妖艶な芸術作品。その日は、一日中、私の頭はフワフワ。仕事にならず。

◎ある知人。浮気ばかりで奥さん泣かせ。昼にソ

ーメンを茹で、奥さんは先に食べ、昼寝のごろり。後から帰ってきた亭主、ソーメンを食べようと自分で用意。『薬味は？』『ネギなら裏の畑にあっぺ！』と起き上がらず。

◎農村のある婆さん。嫁に米を盗んで売られたら大変と、米箱のコメを均して字を書く。これでは手のつけようもない。すると昼は婆さん一人で留守と知ってか、漏電を調べに来たというそれらしい客に、早速お茶の用意。動作は鈍いから時間がかかる。客は奥の部屋を片っ端から探し財布を奪って、さあお茶をどうぞと言ったら、とつくにドローン。あれほどケチな婆さんも、セキユリティは甘い。

◎ある農協での出来事。達磨ストープに弁当を載せ、一斉に昼ご飯。ある中年職員が、弁当を開いたら、あれほど梅干しが嫌いと言っていたのに、今日はどうか梅干しが入っている。うちの嫁は根性が悪い…とかなんとか大騒ぎ。すると、後からある職員が、俺の弁当がない、と騒ぎだした。開けたのを見ると、先に食べたあのおじさんのもの。さっさと他人の弁当を食べ、嫁の悪口をさんざんほざいていた顔のおかしい事。

◎オーストラリアのあるプロゴルフ大会。あるホールでボギー11を叩いた御仁がいた。ティショットが池ポチャ。水際だったのでアイアンで2度叩いたが上がらず。やむなく球を拾い、眼の高さから落としたら、石ころに当たり、何の弾みか、脱いだ自分の靴にボツンと入ってしまった。その後、ラフやOBで、終わったならこのホールだけで、11ボギーとか。

◎私が中米に国際協力事業で滞在した時、日本人単身赴任者は、現地の家政婦を雇い掃除洗濯など

頼んでいた。何もかも自分で掃除洗濯などやるものなら、けちな悪人というレッテル。やむなく現地人を雇うと、冷蔵庫に買い置いたビールや食材は、家政婦が友達を呼んで全部料理をして食べてしまう。豊かな者は、貧しい者に分け与えるのが当然との事。

ポツダムの森

打田昇二

思えば昭和二十年の七月から八月初めにかけて日本国は滅亡の淵に立たされていた。其れは言うまでも無く昭和天皇を頂く当時の政府・軍部が国力も無いのにアメリカ・イギリス・中国などを相手に戦争を始めて、ボクシングに例えれば叩かれ続けて今やダウン寸前のところへ、親切？にソ連が相手側として割り込んできた所為であった。

当時の天皇・政治家・職業軍人などは「日本は神国であるから、国家存亡の危機には神様が助けて下さる…」と盲信していたかも知れないが「文永・弘安の役(元寇)」の時代と違って、気象条件も変わったから「神風」は吹かない。追い詰められた軍部は、辛うじて天皇一家だけを田舎に疎開させ後は「一億総玉砕」を国民に強いるつもりで居たらしいが？冗談も程々に願いたい。

其の頃：正確に言うと西暦一九四五年七月十七日から、ドイツのベルリン郊外に在るツェツィーリエンホフ宮殿(サンサーシ宮殿)中世騎士団のプロイセン王国・ブランデンブルグ選帝侯フリードリヒ大王が所有していた別荘)に英国のチャーチル首相が来て、其処にトルーマン、スターリン、蒋介石らの各国首脳が集まった。首脳たちは降伏をしたドイツの処分を検討していて其の序に日本

にも降伏勧告(ポツダム宣言)をしたのである。

日本の士官学校を出ていた蒋介石氏は此の会談で日本を庇ってくれたらしい…にも関わらず、日本は天皇制存続だけしか考えず一か月もぐずぐずしていたから広島・長崎に原爆を落とされた。

現代日本は平和国家として発展しているが時に敗戦以前に戻る様な気配も感じられなくはない。

「国民有っての国家」であることをお忘れなく！

【特別企画】

打田昇三の将門記 「罪と名声」(二一)

「先んずれば人を制す」とか「早い者勝ち」とか言うがデパートの安売りでは無いから昭和十六年十二月八日の日米開戦時に於ける真珠湾攻撃のように、早過ぎても戦果は挙がるが良くは言われず、事実はどうでも攻められた国では「卑怯な不意討ち」として後代まで記録されてしまう。

当時の日本は天皇の名の許に、何でも「神様頼み」で統治されていたらしいから人間の常識は通用しなかった。其の為に十分な資源も無いのに豊かな二大國を敵に回して戦域を広げ、負け続けが始まったのを自覚せず、広島・長崎に原爆が投下されるまで国民に事実を隠して犠牲を大きくした指導者階層全ての罪と責任は永久に消えない。

一九四五年、大日本帝国の首都・東京まで敵機が悠々と飛来するようになっていた七月二十六日には、ドイツの首都ベルリンの西郊三十五キロに在るポツダム地区のサンサーシ宮殿(プロイセン帝国フリードリヒ大王の王妃宮殿)に於いて米・

英・中二か国の首脳が会談をして日本に降伏の勸告をした。中国代表の蒋介石は日本の士官学校を出ていたから日本を良く知っている。其の勸告を直ぐ受け入れていけばソ連参戦・原爆投下は免れたのに、グズとしか言いようのない連中が神頼みで現実を認識せずに、勸告を無視して終戦を遅らせ、より多くの国民が犠牲にされたのである。

近年は其の過去を忘れて、一部の政治家が「黙って俺について来い！」式の政治をしているように思える。民主主義というのは猿芝居と違つて英雄や人気者を生み出すことでは無い筈なのだが：話は変わり、千年以上も昔のことなので其の俣の比較は出来ないけれども、一族の間に起きた事件の対応が強力過ぎて、実際には受け身の行動であつたにも関わらず「反乱」とされてしまったのが平将門であると思う。此の部分の将門記は中央から将門らに対して出頭命令が出されたところから始まる。公平な目で見れば「喧嘩両成敗」と言われるから当事者双方が呼ばれるべきなのだが：

将門の上洛

現代は急ぐ郵便物に「速達」があるし、電話・FAX・宅急便、或いは本人が航空機か新幹線などで届ければ何処にでも素早く情報が伝わるけれども、平安時代の公用文送致には用件を忘れる程に時間が掛かつたらしく、関東地方で起こつた平将門と同族の合戦についても、事件の発生が承平五年二月四日なのに負けた源護が悔し紛れに出した告発状が都に届き、是に対して役所が動いたのが十二月二十九日、其の結果、出された公文書が関東地方の国府に到着したのが何と翌年

の九月七日である。是では発生した事件も正確には伝わらない。昔からお役所仕事は丁寧である。

然も其の書状は争いの当事者一方の申し立てに従つて裁判も無しに平将門らを犯人と決めつけており、扱つた官庁が「左近衛府」という本来は宮中の警備と天皇行幸に際してのお供が任務の役所なのであるから国家の機能としては支離滅裂であつて昭和の軍国時代と同じく誠にお粗末、とても公平な判断などは望むべくも無かつた。

政府が出す書状に書かれていたのは、近衛府勤務の舎人（とねり）天皇近侍の下級役人）で正六位の番長（つがいのおさ）英保純行（あなほのもゆき）と同苗・英保氏立、それに宇自加支興（うじかのともおき）ら関東に下して事件の検証を行う：とする一方的な内容である。

此の事を知つた将門は、驚くよりは呆れ果てたけれども相手が天皇であるから放つても置けず、自分で意見を述べることにして十月十七日には取り急ぎ都へ向かつて関東を発つたのである。

都に到着した日時は記録に無いが、無事に上京を果たした将門は先ず左近衛府に向いてみた。左右の近衛府は天皇守護が本務であるから、どうかとは思つたのだが、其れが却つて良かったらしく事情説明が天皇にまで達して了解が得られた。尤も当時の朱雀天皇は「その一」の冒頭で述べた様に雷が怖い坊やなので、周りが決めたことに肯くだけで有つたとは思つたが：兎に角、将門は其の足で検非違使庁に駆け込んで行つた。検非違使庁でも天皇が赦免した事案に異を唱える勇氣は無いから形式的な審理を行つただけで「罪重からず、嚴重注意」程度の処分を解放してくれた。

この事が都中に知れ渡ると遙か東国からやつて

来た若者が英雄のように扱われた。平将門が都で勤務していた頃の知人が居たことも幸しいのだと思われる。将門は暫く都に留まつて居て其の間に朱雀天皇の元服儀式などがあり、年号は承平八年から天慶元年と改められたのである。

なお、朱雀天皇の元服と改元の時期について将門記の記述が誤り：とする専門家の御意見が有るけれども、平将門が折角、無罪放免になつたのであるから此処は知らない振りをして話を進める。

恩赦にあい帰国

正確に言う「恩赦」は罪を犯した者が朝廷の慶事などで特別に赦免されることであろうから、最初から罪が無かつた（喧嘩両成敗の原理から言へば一方的に罪を問われる筋合いは無かつた）平将門が赦されるのは当然であるけれども、当時のマスコミは「恩着せがましい」表現をしている。

：恩赦は松の色が千年の緑を含み、帝王が十善の果報の縁に結ばれるように、輝かしい玉座に在る天皇は万民の負担を軽減される目的から恩赦を行われることになつた：承平七年（九三七）四月七日に発布された詔勅により多くの罪人が恩恵に浴したのであるが、平将門も是により一切の罪も嫌疑も責任も無いことが明白になつたのである：本来は此の記述だけで充分なのだが、将門記には古代中国の「燕」の皇太子「丹」の故事が載せてある。怪しい話だが折角なので紹介をして置く。

万里の長城で知られた秦の始皇帝の人質にされていた小国・燕（えん）の太子・丹が何とかして帰国したいと思ひ解放を願つたところ、始皇帝は「カラスの羽根が白くなり、馬に角（つの）が生

えれば赦してやろう：」と言った。太子・丹は天を仰いで嘆き悲しんでいたところ、白い鳥と角が生えた馬が見つかり帰国が叶った：都に滞在していた平将門も、馬や鳥の世話には成らなかつたけれども、竜宮城に行つた浦島太郎のように久しぶりに関東に下る許可が降り、承平七年五月十一日に都を發つて下総国へ歸つてきたのである。

良兼の襲撃

飛行機や新幹線を利用して長旅はくたびれるのに、馬に乗るか歩くかして京都から戻つて来た平将門は懸案事項が解決した安堵感もあつて疲れ果て、自分の屋敷ですつかり寝込んでしまつた。当時の日本国では最高の權威になる天皇が裁定して無罪とされたのであるから是で終りの筈なのだが、都から遠く離れた東国では「天皇」の威光もテレビのコマーシャル程度にしか扱われなかつたのか、無視されたのか、「都から戻つた将門が休養している」という噂を聞いた伯父の平良兼が「是は報復のチャンス！」とばかりに、集めていた軍勢を催して八月六日には常陸・下総両国の境になる「子飼の渡し」に出陣してきた。

その場所は推定ながら良兼らが最初に将門を攻撃して敗れた場所よりは上流の子飼川沿岸であらうと思われる。現在のつくば市吉沼と下妻市宗道と間に架かる愛国橋の辺りか、ただし当時の子飼川は現在よりも下妻寄りに流れていた様である。前回は負けたので学習をした訳では無いが、良兼が必勝の手段として考案して来たのは桓武平氏の御先祖様である故・上総介平高望と、将門の父親になる故・陸奥鎮守府將軍・平良將の拡大写真(当

時は写真が無かつたので似顔絵)を、プラカードにして陣頭に掲げることであつた。

是は確かに作戦としては領けるが卑怯極まりない手段と言える。いくら将門でも、自分の父や祖父の遺影に向かつて弓は引けない。将門記原本には「其の日、明神には怒り有りて確かに事を行うを非とす：」とあるが其の様な問題では無くて、相手が武士らしく無い卑劣な手段を用いた事になると思う。緊急事態であつたので将門が集めた軍勢も少なく、然も目の前に父祖の似顔絵を出された将門は合戦を諦めて其の場から退却する他は無かつたのである。なお伯父・義兼が出して来た似顔絵(看板)の一枚は良將では無く「平国香のもの」とする説もあるようだが現実的に考えれば「将門の父・良將のもの」が合う。

調子に乗つた義兼は、将門の支配地域に攻め込み先ず豊田郡に在つた栗栖院常羽御廐(くるすいんいくはのみうまや)平将門が管理を担当していた政府の牧場)と近辺の農家などを焼き払つた。原本に従えば「村民は確実に火の始末をしたのに怪しい出火で家々が焼けた：」とある。義兼たちは将門の罪になるように巧妙に放火をして回つたのかも知れない。そうしておいて素早く撤退していったから村民の恨みは将門に向いたのである。なお、推定であるが事件が有つた場所は現在の下妻市・常陸市・八千代町が接する辺り「筑波サーキット」の東方近辺であつたと思われる。いずれにしても平将門は敵の術中に嵌つて敗走するしか無かつたのであるから、此処は我慢のしどころで何処かに身を寄せていたのであろう。

敗残の将門

本来ならば此の章段のタイトルは兵力を回復して復讐戦に臨む勇ましい平将門で有る筈のだが其れが出来なかつた―つまり、それを目指した将門であつたが思うように戦えなかつたのである。合戦の場に葬式で使われた写真が出てくるという予想もしなかつた事態に、心ならずも退却をするしかなかつた将門であるが、武士として其の俣では済まされない。一旦は退いてから兵力を増強して四月十七日に改めて堀越の渡しに布陣した。

地名や地形が大きく変わっているから正確では無いかも知れないが、当時の鬼怒川は現在の大形橋近くで宗道十字路の方に流入してから現在の流れに戻つてきていたようである。言うならば其の近辺は平将門の本拠地であつたから、其れを追い払つた義兼の軍勢はその場に留まつていたと思われる。将門にしてみれば一刻も早く屈辱を晴らし武人としての名誉を挽回しなければならず、短期間に其れを実現して一気に名誉を回復すべく矛と楯を三百七セット揃え、其れに倍する兵力を集めて再び堀越の渡しに出てきたことになる。

一方、義兼方でも、将門の反撃は予想していたから防備を怠らない。原本には兵力が書いては無いが「：期に叶いて雲の如く立ち出で、電(いかずち)雷)の如く響きを致す」と記されているから十分な備えで待ち受けていたのである。

其の俣で両軍が激突する筈であつたが、押し寄せる予定の将門軍では思いがけず、総大将が病気で動けなくなつてしまつた。原本には「脚病Ⅱかけ」とあるがビタミンB1欠乏症ならば、最初から合戦などしている場合では無い。此処はサービスで京都市の長旅の疲労が出た：と解釈した

いところではある。しかし、いずれにしても総大将が動け無くては兵士たちも役に立たない。当時は作戦を担当する参謀制度も出来ていない。

合戦が始まるか始まらないかのタイミングなので折角、集めた将門の軍勢は大急ぎで引き揚げるしかなかった。取り残された敵（義兼の軍勢）も慌てたと思うが、八つ当たりで近隣の集落に押し入り民家に火を掛けて回った。「兵が千人群集すれば草木ともに萎（しぼ）む」とは此の様なことを言うのである。戦わずして将門軍完敗である。

此の敗戦について幸田露伴は「将門が都で朝廷からあれこれと咎められた為に自制をした」と述べているが、その影響も無いとは言えない。義兼を呼ばずに将門だけを喚問した朝廷の措置は片手落ちになる。何はともあれ、将門の陣営では戦車より救急車が必要な状況であるから、取り敢えず同行していた婦女子（妻子）も共に飯沼分流の畔に避難していた。しかし敵が搜索を始めたので、妻子は舟で葦津江（飯沼本流、現在は本流も分流も水田化している）に浮かべ、自分は沼の上流部分の岸辺に身を潜めていた。現在では古河市、坂東市、八千代町が境界を接する東仁連川の流域辺りと思われる。その近くに断崖が有って将門は山を背に湖水に対して数日間を過ごしていた。

一方、伯父・義兼のほうは一通りの搜索をしてみたのだが将門を発見できず、結果としては自分が勝利した形になるので、下総国へ戻ることにしたのである。幾ら凶々しい義兼でも公職にある以上は個人的な合戦に専念は出来ない。

葦津江の遭難

繰り返すようだが其の日、将門は体調不良で合戦に臨めないため、家族共に葦津江の岸に避難をしており、大事をとって家族は船に乗せ岸辺近くに係留させていたのである。勿論、敵方は其れを知らないのだが、利で動く「情報屋」が昔から居たようで親切？に現場まで義兼の軍兵を案内して来た。将門軍の兵も守備には付いていたのだが数が少ない。その場で討たれたか、逃亡したか？

将門は七、八艘の船に全財産を積み、複数居た妻と子に乗船させていたのだが妻の一人は敵となつた伯父・義兼の娘か身内の女性だったらしい。其の女性は義兼に連れ戻され、他の妻は殺害されたのであろう。原本には「妻子同じく共に討ち取られ：」「将門が妻は去り：」とある。殺害された女性と思われる木彫像が桜川市木崎の「后（きさき）神社」御神体として祀られている。其の辺りの土地は将門の客分の幕僚・平真樹（たいらのまたて）が管理に当たっていたとされる。

避難先から戻った将門は、隠して置いた妻子の船が襲われたことを知り、愕然としたのである。其処まで卑劣な伯父・義兼を下野国府で見逃したことを悔やむばかりである。一方、連れ去られた将門の妻（義兼の娘？）も、夫たちの身を案じて心其処に有らず、馴れぬ旅路の苦労もあつて宿所では身も心も休まらない。出来ないことだが何とかして将門の許へ逃げ帰ろうと思ひ詰めていた。

世の中はうまく出来ているもので、此の女性は出来の悪い父親？に似ず貞節な心を持つて居たのである。しかし監視が厳重で逃げ出す隙が無い。古代中国の伝説にある貞淑な女性のように死んでしまおうと思ひ、自殺の方法も考えたのだが自殺用の武器も手に入らない。あれこれと思ひ悩んで

いる中に無駄な日々が過ぎてしまった。此の様子を見ていた弟たちが、さすがに気の毒に思い脱走に協力してくれることになった。

方法は原本に書いてないが、兎に角、弟たちの協力で此の女性は上総国から逃げ出して九月十日には下総国豊田郡の将門陣営に戻つて来る事が出来たのである。肉親に背いて夫の許に走つたのであるが、古代中国の女性は夫に自分の父親を討たせたのであるから、其れよりは罪が軽い。

続く

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>